Dandin's Das akumāracarita (Die Abenteuer der zehn Prinzen), Ins Deutsche übertragen von J. J. Meyer. Leipzig 1903.

の序文が貴重な資料を提示している。

なお、私は拙著「印度文化史の課題」（昭和廿二年、雄山閣発行、「歴史新書」4）の中に於いて、前述の如き面に於ける古代印度の婦人問題の一端を点描的に描写するところがあった。参照せられるならば幸である。

解説

中野美代子

本書は、岩本裕博士による訳著『完訳　カーマ・スートラ』（一九四九年二月、杜陵書院刊）の復刻である。

「訳」でなく「訳著」となったゆえんは、詳細をきわめる「序説」「訳註」「後記」を併せると、量的にもすでに三割を超え、その学問的な質の高さとあいまって、たんなる翻訳の域をつきぬけているからである。ちなみに、本書原本の刊行のちょうど一年まえにも、本間太郎訳『カーマスートラ』（一九四八年二月、聖典研究会刊）が刊行されているが、原典各章ごとに付せられている詩頌を欠くなど、戦後まもなくおびただしく刊行されたこの種の通俗書の例に洩れず、まことに安易な抄訳というほかはない。

*

さて、『カーマ・スートラ』についての学問的な解説は、本書「序論」における岩本博士のそれに就かれたい。インド学にまったくしろうとの中国文学者たる私が、お門ちがいにも、

本書復刻本のために「解説」を書くとすれば、それはおそらく、インド・中国をめぐる比較性愛文化試論といったことにならざるをえないであろう。

＊

『カーマ・スートラ』を読んでいてほとほと感心するのは、古代インドの男たちが、女を口説きおとすのに、いかにやさしくあらねばならないかさえも、完璧にマニュアル化されていることである。例えば、次のように――

新婦が抱擁を厭わないときは、新郎は自らの口で彼女の口に蒟醤（きんま）を与える。彼女がそれを受けないときは、優しい言葉をかけ、怨じたり、頼んだり、また跪いて、それを受取るように仕向けるべきである。女はたとい羞じていても、また激しく怒っていても、跪いている男には逆わないのが普通である。

彼女がそれを受けるとき、彼女に優しく音をたてないように軽く接吻をすべきである。接吻によって彼女が和んだならば、彼女が話をするように仕向けるべきである。彼女の言葉を聞くために、彼女がほんの少しの言葉で言いうることを、彼は宛も知らないかのように尋ねよ。彼女が口を開かないときは、彼女の心を乱さないように親しみを籠めて繰返して尋ねよ。それでも尚彼女がものを言わなくても、新郎は辛抱づよく繰返すべきである。

（第三篇、第二章）

中国の性典については、あとで触れることになろうが、そのいずれにも、かくもやさしい男の口説きマナーは見あたらない。とはいえ、インドもまた、中国と同じように、徹底して男尊女卑の社会でありつづけたこと、田中於菟彌氏がその遺稿集『インド・色好みの構造』（一九九一年、春秋社刊）所収「インドの女性問題」において、次のように説かれたごとくである。

婦人は結婚して家庭の妻になると、家事を賄（まかな）い、夫を扶けて家庭の祭事を行い、祭主たるべき男子を儲けることを目的とし、夫に対しては絶対的服従と貞節を旨とし、大家族の中にあって多数の上長に仕え、常に忍従の生活を送らねばならなかった。貞節は婦人の最大の美徳として称揚せられたが、この思想はさらに発展して寡婦の再婚を禁じる習慣を生ませるに至った。

「寡婦の再婚を禁ずる習慣」のひとつに、サティーすなわち「寡婦焚死」という忌むべき風習があり、一八二九年に法的に禁止されたあとでさえ、時おり見られるという。これほど

「男尊女卑」の思想が根づよいインド社会において、女にやさしい男の口説きマナーをもつ性愛文化が生まれたこと、中国の側から見るかぎり、大いなる謎といわなければならない。その謎が解けるかどうか、ともかくも『カーマ・スートラ』におそるおそる接近してみよう。

*

第一篇「総論」において、とくに感に堪えたのは、女が学ぶべき「カーマ・スートラの副科をなす六十四芸」である。一六「化粧術」、一八「香料の使い方」、二三「種々な野菜、汁及び食物の調理法」、二五「針仕事」などはあたりまえのこととしても、三六「大工仕事」、三七「建築に関する知識」、三八「銀及び宝石の鑑定法」、三九「冶金術」、四〇「宝石の色及び由来に関する知識」などに至っては、すでにかなり高度の知識が要求されていたことがわかる（今日の男女とも、少数を除けば高度の専門知識として敬遠するだろう）。さらに、三〇「難かしい語句の発音法」、三一「書物の朗読」、三二「戯曲や物語の知識」、三三「詩頌の一部（普通に（ママ）最後の一詩節）を示して全体を完成すること」、五三「詩句の脱落している部分を補うこと」、五四「辞典に関する知識」、五五「韻律に関する知識」、五六「作詩法」など、かなりの重複があるにせよ、言語・詩（韻律）・戯曲・物語をめぐる高度の知識が要求されたらしい。

このなかで、私がはたと膝をたたいたのは、「戯曲や物語の知識」の項である。岩本博士

の「序説」にも詳述されているように、『カーマ・スートラ』とほぼ同時代には、「演劇に関する理論書というより文芸の全般に関する百科全書的な案内書」というべき『バーラティーヤ・ナーティヤ・シァーストラ』なるものが成立していたらしい。『カーマ・スートラ』の成立年代は、「西暦三百年の前後の頃」とのことであるから、そのころに、すでに高度な演劇理論書があり、それゆえに、『カーマ・スートラ』が「六十四芸の一として演劇に関する知識を要求している」ことは、「実にこの書（『バーラティーヤ・ナーティヤ・シァーストラ』）に見られるが如き広汎な教養と知識とをさすものに外ならない」のである。

さて、ひるがえって中国を見ると、演劇の発生は、じつに十三世紀、元の時代までくだる。もちろん、元にさきだつ宋代にも、雑劇と称する演劇の萌芽的なものはあった。また、古く漢代からも、楽舞・傀儡戯（人形芝居）・雑技（幻術や種々の曲芸）などはあった。しかし、一定のルールをもった演劇が確立したのは、モンゴル支配下の元の時代だったのである。

インドの古典劇の傑作として知られる四～五世紀のカーリダーサの『シャクンタラー』を見ると、その物語の展開におけるある種の陳腐さはともかくとして、ドゥフシャンタ王とシャクンタラーの恋のかけひき、愛のことばなどの巧みさ、美しさは、さすがゲーテをして感嘆せしめたに足るものがある。田中於菟彌氏の訳（『筑摩世界文学大系』9『インド／アラビア／ペルシア集』一九八四年、所収）にて、その第三幕「恋の喜悦」の一部を引くならば——

王　〔二本の指で顔をもち上げ、独語〕
　汚れも知らぬ　やわらかき、いとしき君が唇は、やさしくふるえおののきつ、
　吸わんと願うこのわれを、許さんとする気配なり。
シャクンタラー　あなた、お約束はまだですの。
王　いや、耳の蓮華が近くにあるので、あなたの眼とまぎらわしくて、迷っているのです。

ラシーヌの『フェードル』とも見まがうほどの甘い、切ないことばのやりとりが随所にちりばめられているが、男女の愛の経緯を、中国ふうにいえば、白と科と唱をもって生身の俳優が演じる演劇が、古代から発達したインドなればこそ、『カーマ・スートラ』第二篇「性交」も、とくに第二章「抱擁の様式」、第三章「接吻の種類」が、ほとんど芝居の台本であるかのように、演劇的に詳述されているのであろう。

而して、下唇に接吻をする際に、男は遊戯を始めるべきである。最初に下唇を銜えた者が勝であるとすべきである。そのとき、女が敗けると、彼女は半泣きになって、手を振り動かし、指でつついたり咬みついたりし、抱きしめられている身体を動かして無理に離れ

ようとし、「もう一度しましょう」と言うであろう。それでも亦敗けると、彼女は再び泣き口惜しがるであろう。（第三章）

*

『カーマ・スートラ』における、このような性愛の演劇性は、私たち極東人の目から見れば、そのはるか西の果ての、古代ローマのオウィディウス『恋の技法』（樋口勝彦訳。平凡社ライブラリー。一九九五年、平凡社刊）を思いおこさせるであろう。

紀元前四三年から後一七年に生きたこの詩人は、『変身物語』をもって、いまにひろく知られる。とはいえ、オウィディウスは、この『恋の技法』が誨淫の書であるとの理由で、ローマ初代皇帝アウグストゥス（前二七～後一四在位）により、黒海沿岸のトミスに追放された。そのもっとも美しいくだり――

まったく venus の喜悦は急ぐべきものではなく、ゆっくり手間どることによって、徐々にそそらねばならぬ。女がさわってもらうのを嬉しがるところを見つけたならば、羞恥のために、そこにさわることをためらってはならない。／ちょうど日光が往々流れる水に映るように、目はふるえる光を発して輝くのをきみは見るであろう。嘆きの声が立ち、快いうなり音が発するであろう。また甘い溜息が、この遊びにふさわしい言葉が発するであろ

う。しかしきみは、より大きな帆を用いて女の先を越さないようにし、また彼女にはきみの速度より先走らしめないようにしたまえ。同時に決勝点に着くよう急ぎたまえ。女も男も敗北してしまったそのときこそ、喜悦は満喫される。（第二巻。邦訳九六～九七頁）

男女の性愛を帆走にたとえ、「同時に決勝点」に達したそのときが、すなわちともに「敗北」の「喜悦」であるとする、おそるべき詩的言語である。とはいえ、『恋の技法』が風紀紊乱のかどでアウグストゥス帝の怒りを買ったゆえんは、次なる一節にあろう。

女は各自、自分を知らねばならない。方法はからだに応じて確かな方法をとりたまえ。一つの型がすべてに向くわけではない。顔のすぐれた女は、あおむけに寝たまえ。背に魅力のある女は、背後から見てもらいたまえ。ミラニオンはアタランタの脚を肩で担いでいた。脚が美しかったら、このように脚をとらねばならない。小柄な女は馬乗りになるがいい。（略）横腹が長く、そこに見るべき魅力のある女は、首をやや後方にそらして、膝で寝台を踏みつけるがいい。腿が若々しく、胸に欠点のない女は、男を立たせ、女自身は床を斜めに横たわるがいい。（略）もっとも疲れない簡単なのは、右側を下に半ばあおむきに横たわることである。（略）女は骨の髄から溶けてしまうほど venus を感じなければならない。そして、これは両者に等分の喜悦をもたらすべきである。（第三巻。邦訳一四三～一四四頁）

これぞまさしく、性交の体位を述べた問題の個所である。古代ローマにおける女性の地位がいかに低かったかは、バーン&ボニー・ブーロー『売春の社会史――古代オリエントから現代まで』（香川檀ほか訳。一九九一年、筑摩書房刊）にもくわしいが、それはともかく、オウィディウスが、性交において、女が「自分を知」ったうえで「確かな方法」すなわち体位をみずからえらべ、と述べているのは、注目に値するであろう。

ひるがえって、『カーマ・スートラ』における「性交」の項は、より具体的である。その詳細については、本訳書に直接に就かれたいが、さきに述べたように、接吻を演劇的に進行させ、次いで「情慾の昂進したときには、本質的には摩擦である爪による搔爬が行われる」と、男女が抱擁しつつ相手のからだに爪をたてたり、歯で咬んだりなどする行為についても、くわしく分類してから、「性交」をめぐる項に進む点が注目される。さらに、「性交」の際の「愛打」や「シート音」や「口唇による性交」にいたるまで詳述してあるのには、驚嘆するほかないであろう。徹底した男尊女卑の社会でありつづけたインドにして、男の情欲を満たすためには、いかに女をよろこばせるか、いかに女の愛を贏（カーマ）ちうるかという、まさに「愛

経」である点に、オウィディウスをはるかに超えた「技法」への執着が見られるであろう。

＊

では、中国では？　古代中国にも、もちろん房中経典すなわち性典はあった。しかし、その大半は散佚してしまい、諸書に引用されている佚文を捜集し再構成したものがのこるのみである。有名なのが、葉徳輝（一八六四～一九二七）が編んだ『双梅景闇叢書』（一九一四年刊）である。

こうして復元された例えば『素女経』は、原本が前漢（前二～一世紀）のものとされる。黄帝が房中の秘事についてたずね、素女が答えるといった形式をとる。その問答は、すべてこれ、男の健康保持のための理想的な性交マニュアルをめぐるものである。玉茎にも、儒教でいう「五常」すなわち仁・義・礼・信・智があると、素女は説く。ふだんはじっとかくれ節度を守っているが、施すときには出し惜しみしないのが仁。なかが空洞になっているのが義。先端に節のあるのが礼。欲望が湧けば起ち、湧かなければ起たないのが信。ことに臨んで、低くなったり高くなったりするのが智。――なんとも常識的な、しかも陳腐な「五常」ではあるが、つまりこれが、男の基本である。

次いで、男の目から見た女のからだの変化について、「五徴」すなわち五つの徴あり、それによって玉茎の動きを決めるべきことが説かれる。また、女の側の「五欲」についても述

べられ、例えば、陰が欲情して玉茎を迎えたくなったときは、鼻孔をふくらませ口をあける、などといった欲情の生理学なのである。さらに、性交時の女のからだの動きを「十動」と称し、十種の動きから女の快感の度合いを測ろうとする、欲情のいわば生態学である。しかし、いずれも、男にとって最良のタイミングを知るための指針であるから、女の主体的な心の動きや、男女の愛のかけひきなどは、当然のことながら、どこにも見られない。

こうして、「九法」すなわち性交の体位九種を列挙するにいたる。いわく、「龍翻」「虎歩」「猿搏」「蟬附」「亀騰」「鳳翔」「兎吮毫」「魚接鱗」「鶴交頸」。例えば「龍翻」は、いわゆる正常位であるが、玉茎の動きを「八浅二深」と回数まで規定しているところ、さすが中国人！　と拍手したくなるではないか。

それにしても、「九法」のいずれにも動物名がついているのが、『カーマ・スートラ』と共通しているといえば、いえる。第二篇第六章（一四）「特殊な性交」の項に、「牝牛性交」「驢馬の歩み」「猫の戯れ」「虎の飛躍」「象の破砕」「猪の突進」「馬の登攀」などあり、さらに詩頌にて、次のようにうたっているのが注目される。

家畜、野獣、鳥などの
交るさまを見倣いて

賢き人はあれこれの
手段を試み、交りを
楽しむ法をあまた増せ。

中国『素女経』の「九法」における動物名は、たしかにそれぞれの動物の特性を一部つたえてはいるものの、すべては中国人ごのみの言語遊戯であって、それぞれの体位を記述するにあたっての、あからさまな、そして無味乾燥な即物主義を隠蔽するための、虚飾にすぎないのであった。そして、この「九法」の体位すべては、男の「百病」をなくしたり、「精力を百倍に」したり、といったぐあいに、男の健康にとって有益であることが強調され、少なくとも理念的には、愛を「楽しむ法」ではないことが確認されるのである。

同じく『双梅景闇叢書』に収録され、復元された『洞玄子』では、この体位が「三十法」に増えている。その二十八「猫鼠同穴」は、「男は仰臥して足を展ばし、女は男の上に伏せて深く玉茎を内れる。または、男が女の背の上に伏せて、玉茎をもって玉門の中を攻撃する」といったもの。命名が傑作なわりには、命名の由来が必ずしも分明ではない。

体位はともかくとして、中国の性典が重視するのは、男の長生のための秘法「還精補脳」すなわちみだりに射精せず還流させて脳を補強する方法である。すでに古く四世紀の『抱朴子』に、この方法の重要性が説かれ、隋代の性典『玉房秘決』に、その詳細な実践方法が説かれる。性典が長生術のサブ・テクストだとすると、煉丹術における内丹（身体を鼎炉とみなし、体内にて金丹をつくる法）もまた、外丹（鉛汞など卑金属から金丹をつくる法）と呼応しつつ、秘教的な性典を形成する。その場合、基本物質である鉛と汞（水銀）に、それぞれ男・虎・坎と女・龍・離など複雑難解なシンボリズムを託し、鉛汞の出会いから結合・射精・受胎・出産の過程を、ひとつの演劇として、主に八十一首の連作詩で詠むことが多い。『恋の技法』や『カーマ・スートラ』に見られる性愛の演劇性は、中国においては、煉丹術詩に、はなはだ難解なかたちで見られるのである。拙稿「煉丹術ドラマ」（拙著『仙界とポルノグラフィー』河出文庫。一九九五年、所収）参照。また、アンリ・マスペロに次いで中国の性学を体系化したロベルト・ハンス・ファン・フーリック『古代中国の性生活』（松平いを子訳。一九八八年、せりか書房刊）も。ついでに、中国の性典を、内丹書も含めて網羅、英訳し、詳しい訳注を付した Douglas Wile, *Art of Bedchamber——The Chinese Sexual Yoga Classics including Women's Solo Meditation Texts* (Albany: State University of New York Press, 1992) も、近年の労作として紹介しておこう。

*

中国の性典は、あとになればなるほど、煉丹術との隠微なつながりを深めていく傾向があ

るのだが、いっぽうでは、いわゆるインポテンツや女の陰道弛緩に効果のある薬の処方についても忘れない。とはいっても、例えば、『洞玄子』におけるインポテンツ対策の薬は、鹿角・柏子仁・兎糸子・蛇床子・車前子・遠志・五味子・縦容をそれぞれ四分、搗いて篩にかけ粉末にしたものを、毎食後に五分ずつ服用するといった、本草学伝統の記述で、またもや興をそがれる。

『カーマ・スートラ』は、第七篇「秘法」を、ほとんど媚薬の説明にあてている。もっとも、第一章「魅力を増す方法」では、媚薬というより「美貌を増す」ための特殊な化粧法が説かれるが、これまた中国の性典では絶対に見られぬ観点といえよう。

媚薬については、立木鷹志『媚薬の博物誌』（一九九三年、青弓社刊）およびC・M・エーベリング、C・レッチュ『媚薬――エクスタシーと快楽のドラッグ』（一九九五年、第三書館刊）参照。立木は『カーマ・スートラ』についても触れている。

オウィディウスは、媚薬についてはごくわずかしか触れない。しかし、少しあとのペトロニウス『サチュリコン』は、サチュリコンなる語の原形サチュリオンがすでに媚薬・催淫剤の名だそうで、これだけでも、小説『サチュリコン』の中味が推測されるというものだ。

*

オウィディウスといえば、かれとほぼ同時代のポンペイのまちの家々の壁に描かれ、後七

九年八月二十四日のヴェスヴィオ火山の噴火で埋もれた、数多くの壁画が思いだされる。いま、ナポリ考古学博物館の「限定公開の作品の部屋」に秘蔵されているそれら壁画の一部が、マイケル・グラントほか『ローマ・愛の技法』（書籍情報社編訳。一九九七年、書籍情報社刊）にて見られる。一九九七年四月十二日～六月十五日、横浜美術館にて開催された「ポンペイの壁画展」では、あまり保存状態のよくない「エロティックな場面」が二点ほど出品されていたが、マイケル・グラントの本には、ポンペイ出土の壁画・モザイク画およびその他のブロンズ像など、かなり収録されている。

性愛を描いたこの種の視覚芸術（ヴィジュアル・アート）は、東西を問わず禁忌の対象となっていた。しかし、インドでは、これが極めてあからさまな「神々の結合」として描かれる。有名なカジュラーホのカンダーリヤ・マハーデーヴァ寺院（十一世紀）やコナーラクのスーリヤ寺院（十三世紀）壁面にびっしり見られるミトゥナ像のごときは、ポンペイ壁画にたいする発掘以来の特殊なあつかいとくらべると、あまりにも径庭があろう。

ミラ・ナイール監督、インディラ・ヴァルマ主演のイギリス・インド合作映画『カーマ・スートラ』（一九九六年）にも、ほとんど当然のように、カジュラーホのミトゥナ像が写されていた。フィリップ・ローソン『タントラ――インドのエクスタシー礼賛』（松山俊太郎訳。イメージの博物誌8、一九七八年、平凡社刊）によれば、「性的交合は、かくして、神的

な崇拝と至福の、模範ないし象徴となった。適切な儀式とマントラをともなって、特別なやり方でおこなわれた場合、性的交合は、開悟という目標に達するための、もっとも強力な助けとなりうる」。

中国にも、もちろんエロティック・アートすなわち春画の伝統はある。さきに挙げたファン・フーリクは、『古代中国の性生活』に先だって、私家版で『秘戯図説』（英文。一九五一年刊。復刻本一九八七年刊）を出している。またかれのコレクションにもとづく Abraham N. Franzblau (introduction) and Étiemble (postscript), *Erotic Art of China* (New York: Crown Publishers, 1977) や Étiemble, *YUN-YU. Essai sur l'érotisme et l'amour dans la chine ancienne* (Genève・Paris・Munich: Nagel, 1969) など、美しいカラー版の春画集も出ている。とはいえ、中国の春画の最大の特徴は、男女ともに、はだかの肉体の存在感がゼロであること、男女の顔つきがニル・アドミラリであること、などに在る。つまり、さきに述べた中国の性典と同じように、性愛における快楽を描くのではなく、性交時の体位の、いわば「図解」にとどまる。拙著『龍の住むランドスケープ――中国人の空間デザイン』（一九九一年、福武書店刊）III―4「春画のなかの庭園」参照。春画を、中国・インド・ヨーロッパ、そして日本と、比較しつつ記号論的に分析するのは面白かろう。

*

性愛の文化が、ことばを通じてもっとも早く、もっとも美しく開花したのは、すでに見たように古代ローマであろう。オウィディウスが『恋の技法』で語った美しいアルス・アマトリアが、インドの『カーマ・スートラ』とおどろくほど共通した要素があること、私は認めないではいられないが、岩本博士によれば、「印度独自の科学として性学が発達し」たとのことである。いずれにせよ、古代ローマ人もインド人も、男のための性愛を追求する点においては、中国人と共通しながら、性愛に至る「シュリンガーラ（恋愛情緒）論が展開された」（岩本博士）がゆえに、女の快楽についても追求していること、中国人とはなはだしい径庭があるといわなければならない。

わけても、『カーマ・スートラ』が「性交の終」のあとに展開している「シュリンガーラ論」は秀抜で、「或は、二人して露台に出で、座して、月光を賞美する。そのときには、彼は彼女の気に入るような物語をすべきである。彼女が彼の膝に倚りかかって月を眺めているとき、彼は彼女に星宿の集りを説明し、アルンダティー星、北極星及び大熊星座の七星の環を指し示すべきである」といった優美なマニュアルは、まちがっても、中国の性典には見られなかったのである。

中国の性愛文化が花ひらくのは、明代である。だが、それについて論ずる場では、ここはない。私はただ、『カーマ・スートラ』を、東の中国から、また西のローマから、わずかに

のぞいてみただけなのである。

＊

岩本裕博士の講筵につらなったことはない。また、お会いしたこともない。ただ、数回ほど電話をいただいたことはある。すべては、本東洋文庫にも収められ、未完のままになっている博士訳『ラーマーヤナ』をめぐる話柄であった。一九八八年四月十九日に急逝される二週間ほどまえにいただいた電話では、「ラーマーヤナ研究会」をつくるから、それに参加せよ、とのお話だった。ご遺志を継いだ上智大学の石沢良昭氏が、その研究会を発足させ、私も参加した。以来、石沢氏から学恩を受けること多く、岩本博士との目に見えぬ因縁を感じつづけている。

それらのことを思いだし、ひそかに謝しつつ、博士旧訳の『カーマ・スートラ』をめぐり、しろうとなりの「解説」を草した次第である。

一九九七年九月　はじめてのインドへの旅を目前にして

［編集付記］

一、本書は岩本裕訳著『完訳　カーマ・スートラ』の復刻である。
一、本書の底本には昭和二十四年（一九四九）杜陵書院刊のものを用いた。
一、底本の明らかな誤植は訂正し、漢字・仮名遣いは通行のものに改めた。
一、読解の便を図るため、適宜振り仮名を付した。

いわもと　ゆたか
岩本　裕

1910年愛媛県生れ。京都帝国大学梵語学梵文学科卒。1988年没。
主著訳書『日本仏教語辞典』(平凡社)、『ラーマーヤナ』1、2(平凡社東洋文庫)。

完訳 カーマ・スートラ　　東洋文庫 628

1998年1月9日　初版第1刷発行

訳著者　岩本　裕
発行者　下中　弘
印刷　創栄図書印刷株式会社
製本　株式会社 石津製本所

発行所　電話編集 03-5721-1252　〒152 東京都目黒区碑文谷 5-16-19
営業 03-5721-1234
振替 00180-0-29639　株式会社 平凡社

© 株式会社 平凡社 1998　Printed in Japan
ISBN4-582-80628-7
NDC分類番号 126　全書判(17.5 cm)　総ページ 376

乱丁・落丁本は直接読者サービス係でお取替えします(送料小社負担)